

03

詩集『トットリッチ』の視覚伝達

Visual communication in “tottorich” book design

デザイン学科・非常勤講師
 Department of Design・Part-Time Lecturer
 長澤 昌彦 Masahiko NAGASAWA

はじめに

グラフィックデザインの役割は、近年のメディアと社会の多様性により多岐にわたるようになったが、基本的には「色」と「かたち」と「タイポグラフィ」を駆使し、情報やメッセージを視覚伝達することにあると筆者は考えている。

筆者がデザインした岡田ユアンさんの詩集『トットリッチ』が、2014年の「世界で最も美しい本コンクール」で栄誉賞を受賞した際、言語と文化の異なる審査員にプレゼンテーションの機会なしにデザインの試みが伝わり、視覚伝達の成功を確認することができた体験を報告したい。

1 詩集『トットリッチ』のブックデザイン

1.1 制作の経緯

詩集『トットリッチ』は著者の岡田ユアンさんが「詩と思想」新人賞を受賞したことで、土曜美術社出版販売から2012年に発刊された。ブックデザインの仕事は編集者とのミーティングにより進行するケースが多いが、『トットリッチ』のブックデザインは著者の「内容に即した装幀にしたい、著者のかわりに装幀が読者に語りかけてほしい」という強い意志の下、著者と直接ミーティングを重ね仕上げた稀なケースだ。「質感」「バウハウスのような構成主義」「間」「現代」というキーワードをいただき、制作が始まった。詩集に収められるそれぞれの詩が生まれた背景の一端を聞きながら理解を深め、30案以上のスタディを重ね、完成した。

1.2 ブックデザインの概要

詩集のタイトルでもある『トットリッチ』は「夜とも朝ともいえない曖昧な時間帯に聞こえた鳥の鳴き声」——その情景を、装幀で図像・用紙・印刷を駆使し表現することを試みた。

抽象的に図案化した鳥に、太陽にも月にも卵にも見える小さな円を加え、また帯もビジュアルの一部として考え、情景に一筋の線が加わり、見る人によって多層的に捉えられるデザインとした。

グレーのラシャ紙をカバー用紙とし、そこにホワイトインキの二度刷り（一度印刷した上に重ねてもう一度刷る）とシルバーインキを刷り、曖昧な白、本を見る角度によってグレーの用紙に溶け込んだりキラッと光ったりするシルバーが、空間や時間の表現に奥行きをだした。

表紙を開くと鮮やかな黄色の見返しは、読者の無意識の覚醒を狙い、また表紙から時間が経過し朝になり、光が射し込む意味も込めてセレクトした。本文用紙も白色度の高いものを選び、花布（はなざれ：上製本の背の天地を飾る布）も鮮やかな黄色とし、カバーの曖昧な色彩との対比、そして小口の美しさを狙った。

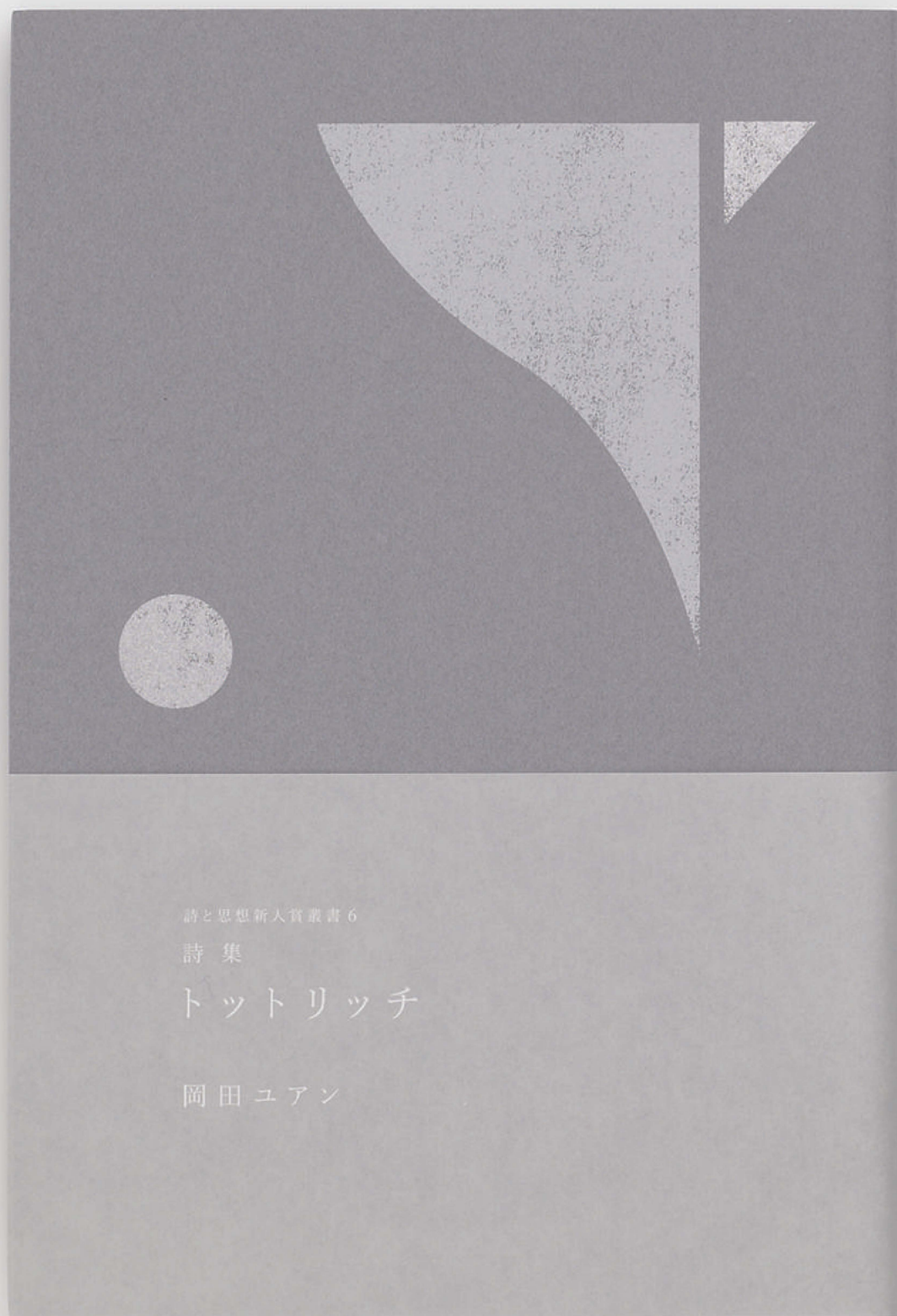


写真1: 岡田ユアン詩集『トットリッチ』/2012年/土曜美術社出版販売/A5判変型・上製本・96ページ

2 「世界で最も美しい本コンクール」2014

2.1 「世界で最も美しい本コンクール」とは

「世界で最も美しい本コンクール」は世界でただ一つの国際ブックデザインコンクールである。審査対象となるのは各国のブックデザインコンクールで入選した本で、日本からは毎年「造本装幀コンクール」の受賞作が出品されている。詩集『トットリッチ』も「第47回造本装幀コンクール」で「たたずまいが美しい」と評価を頂き、日本印刷産業連合会会長賞を受賞し出品される運びとなった。

2013年10月フランクフルトブックフェア(ドイツ)で出品作が公開されたのち、2014年2月にライプツィヒ(ドイツ)で審査が行われ、世界30カ国567点の中から「世界で最も美しい本」14点が選出された。『トットリッチ』もその中の1点となり栄誉賞を頂いた。同年3月のライプツィヒブックメッセで授賞式が行われ、その後ライプツィヒの国立図書館に併設されている「ドイツの本と文字の博物館」に収蔵された。

審査員は世界各地から毎年新たに招聘される7名で、ブックデザイナーだけでなくタイポグラファーやイラストレーター、キュレーターなどが審査にあたる。本の内容とデザインの整合性については各国の審査でクリアしたものとし、このコンクールでは本としての美しさに焦点があてられる。『トットリッチ』の選評(2.2)も画像やタイポグラフィーだけでなく、製本や紙・花布・印刷のディレクションにまで目を向けられているのが分かる。

2.2 『トットリッチ』栄誉賞選評

ミニマリズムは、表現願望を抑制しようとする禁欲主義と同義ではない。いずれにせよ、この静かに語られる詩集の特徴は、一見ただけではわからない精巧さにある。わずかな文字や図形で構成されたマットなグレーの紙のジャケットは3色で印刷されている。丸背(背に丸みを作り、小口はへこみを作ることでめくりやすくする工夫をした本)の薄い本体のくるみ用紙には青みのあるグレーが用いられ、また帯にはさらに微妙に色調の異なるグレーで印刷されている。

黄色い見返しと黄色い花布は、灰色の空に射す明るい光の輝きのようだ。詩は、各ページの上から軽やかなペールの魔法をかけかのように降りてくる日本語特有の縦書きで綴られ、詩のタイトルは、透かしの技術を用いた装飾的な紙にグレーで印刷され、独自の品質で特別に糊付けされている。

日本語を読むことが出来ないとしても、そのタイポグラフィーの美を楽しむ妨げにはならない。ページの表面には、日本語を解さないことによる意味の空白はなく、むしろその空白が静かなニュアンスを感じさせるものとして際立っている。



写真2:花布の黄色と小口に見える見返しの黄色が鮮やかで美しい



写真3:本文組は余白をたっぷりとしている

2.3 『トットリッチ』の視覚伝達の成功

このさりげないオーソドックスな詩集が栄誉賞をいただいたことにまず感謝したいが、視覚伝達の成功が確認できるのはその選評だ。このコンクールはプレゼンテーションシートなどは全くなく、ただ作品が入念にチェックされ熱心に議論されるのだが、著者と筆者によるデザインの試みが、言語と文化の異なる審査員に全て解析されていることに驚き、グラフィックデザインの役割——「色」と「かたち」と「タイポグラフィー」を駆使し、情報やメッセージを視覚伝達すること——とその面白さを改めて体感することができた。

ブックデザインが読者や読者になりうる対象へ、無意識に与える影響は大きい。これからの活動にも勇気を与えてくれた体験である。



写真4:光が射し込み明るく活気のあるブックメッセ会場(ドイツ・ライプツィヒ)



写真7:授賞式でスクリーンに『トットリッチ』が映し出され選評が述べられる



写真5:「世界で最も美しい本コンクール」展示エリア



写真8:ドイツエディトリアル財団より賞状を授与される筆者



写真6:14点の受賞作は台上に展示され閲覧しやすくなっている



写真9:受賞者の記念撮影